

# リスニング指導と文法指導の接点

松坂 ヒロシ

## はじめに

英語のリスニングに関して、学習者や指導者が抱きやすい誤解の1つに、「リスニングはひとえに音声面の作業である」というものがあります。本稿では、リスニングは、音声のみならず、意識的であるか否かはともかくとして、文法知識を動員して行うものである、という点について述べたいと思います。

## 1. 音声半分、文法半分

このたび「リスニングの基礎を固める Listening Skills」という教材の作成を担当しました。この教材は、音声面に苦手意識をもつ学習者が、リスニングを効率よく勉強できるように組み立ててみました。苦手意識は勉強の先送りにつながります。学習者が無理のない形で音声について学び、先送りと苦手意識増大との悪循環を断ち切るのを支援しようと思った次第です。

言うまでもなく、リスニングにおいて音声は不可欠な項目です。たとえば、[r]と[l]との響きの違いについて情報をもたない学習者にとって、これらの聞き分けは困難です。したがって、学習者にこれらの音の響きと口の動きとの関連をわからせるのは、指導者の重要な仕事です。本書では、monthの複数形は[mants]と聞こえがちであることや、worldの発音の過程では巻き舌が緩む瞬間があるので、この語は[rɔ]という音の連なりを含んでいるような印象を与えがちであることも教えています。この種の、つづり字からは想像できない音声の現実も、軽視することはできません。

しかし、このような音声面の説明に終始しては、十分なリスニング指導ができません。なぜなら、リスニングには、文法との接点があるからです。現に、私はリスニング指導をするとき、「リスニングは音声半分、文法半分」と言うことにしています。むしろ、これはことばのあやであり、現実にはリスニ

ングに必要な実力としては、文法に加え、語い、論理、背景知識など、種々の力が挙げられます。しかし、私が「音声半分、文法半分」という、やや乱暴な言い方をする理由は、学習者に音声と文法との密接な関係を目を向けさせたいからです。

## 2. 音のくずれと文法

音声を切り口としたリスニングを中心にしながら、私は教材の後半で、次のような事項に触れました。

1つは「弱形」の問題です。ご承知のとおり、ある種の単語のうち、短母音を音節主音とする単音節語には、弱形と呼ばれる発音があります。これは、その短母音を強勢のない[a], またはそれに近い母音に変えたものです。ここで言う「ある種の単語」とは、文法面から特定できます。冠詞、代名詞、be動詞、存在のthere、助動詞、前置詞、接続詞、関係詞といった、特定の範ちゅうに属する単語です。機能上、あたかも不定冠詞の複数であるかのような働きをする例のsomeも、弱形をもちます。弱形をもつ語は、強調の必要性などの特段の理由がないかぎり、弱形で発音される可能性が高いものです。

さて、リスニングを教える以上、弱形を教えないわけにはいきませんが、同時に、これが特定の種類の単語に限ることも合わせて教えなければ、学習者は「あらゆる単語が弱形になって聞き取りにくくなってしまふのなら、英語のリスニングなど不可能に近いではないか」と思い、不安に陥るかもしれません。教師には学習者の心からこの不安を取り除く責任があると思います。

弱形には「肯定」か「否定」かという、非常に重要な識別にかかわるものがあります。本書で取り上げたcanとcan'tとの区別が好例です。canはしばしば弱形をとりますが、can'tは否定の副詞notが担うべき強勢を担うので、弱形になりません。学習者は両者の区別は[t]の有無によってすればよいと思

いがちですが、現実にはこの手がかりが使えないケースがほとんどです。この場合、「弱形が聞こえてきたら肯定」という知識が、1つの重要な手がかりとして浮上します。

また、本書ではbe going toが[gəʊnə]になる「くずれ」を取り上げましたが、その際、くずれが起きるのはこのフレーズが全体として助動詞的働きをする場合に限ることに触れました。goが文の中で名実ともに述語動詞である場合は、be going toにくずれは起きません。つまり、くずれはbe going toについての文法的な情報を伝える働きをしています。

以上のような、くずれと文法との関係に加えて、リスニングをする上で、学習者が動員すべき文法的情報があります。例えば、「数」や「時制」や「人称」の一致があります。こうした知識が動員できれば、「動詞に-sがついているから、主語は単数にちがいない」「主節の動詞が過去形だから、従属節内の動詞の時制は過去形や過去完了形になってもおかしくない」「前に単数のものが言及されたから、ここの代名詞はitのはずだ」といった判断ができます。

### 3. 学習者をスタートラインに

言語の情報処理のプロセスとして、トップダウン処理とボトムアップ処理という2つの方式があると言われています。非常におおまかな言い方をお許しただけならば、前者は「話題、文脈、背景知識などの全体的な情報を動員して言語の解釈を行うプロセス」であり、後者は「個々の単語、フレーズといった小さな単位を組み合わせることで全体をつかんでいくプロセス」です。

今回私がまとめた教材は、音という非常に小さな単位に焦点を当て、学習者にボトムアップ型の聞き取り訓練をしてもらうことを眼目としています。この方針は、トップダウンに比べてボトムアップがよりよいとか、より重要だとかいう考え方によるものではありません。そもそもリスニングにおいては、両方の処理のパターンが使われ、しかも双方が互いに他をサポートするものである、という考え方が一般的です。

文脈をたどることに優れている学習者は、もし文脈から取り出して単独の形で与えられたとしたら非常に聞き取りにくいようなくずれた発音の単語を、楽に理解するかもしれません。逆に、多くの個別の

要素を把握できる学習者にとっては、その分、文脈を把握することが容易でしょう。

要するに、音の勉強であれ、単語力増強の努力であれ、文法学習であれ、論理面の訓練であれ、すべてリスニング力の開発に寄与するものなのです。今回作った教材は、音声を中心とした勉強によって、学習者をスタートラインに立たせようという意図に基づいています。

### おわりに

日本の平均的な英語学習者は音声面に弱い、とよく言われます。確かに、例えば、国際的な検定試験において、日本の学習者のリスニングの点数は、文法面の点数に引き比べると、あまり芳しくないという指摘もあります。こうした傾向は、しかし、日本の学習者の本来の能力を反映したものではない、と私は思います。日本の英語教育が伝統的に文法や読解を中心としたものであったことが大きな原因であり、これは学習者にとってみれば、あくまでも「外的な」要因です。

「では、なぜ、そんなバランスの悪い英語教育を長年続けてきたのか」と問われたとき、多くの英語教師は、「英語教育は、いやおうなく、筆記試験の形をとる入学試験に対応せざるをえないのが現状である」と答えてきました。社会のさまざまな場面で、英語力の指標として、リスニングを含む大規模検定試験の成績が重視されるようになり、また、入学試験も音声面をより重視する方向に舵を切り始めた今日、いま述べたような内容の答えは、少なくとも以前ほどには受け入れられなくなっているように思います。

われわれの目の前の学習者は、「日本の学習者は音声に弱い」という評判を跳ね飛ばす元気を十二分に内に秘めている、と私は確信しています。

### 参考文献

- Brown, G., and Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.  
 Marslen-Wilson, W. D., and L. Tyler. (1980) 'The temporal structure of spoken language understanding.' *Cognition* 8: 1-71.

(早稲田大学教授)

松坂ヒロシ先生の

新刊

# 『リスニングの基礎を固める Listening Skills』

が、弊社より発刊されました！

本冊 B5判・40頁／別冊解答 B5判・24頁／税込定価360円／別売音声CD (税込定価300円)

高校生のリスニング指導はどうあるべきなのでしょう。まずは英語の何が聞き取りづらいのか、どうすれば聞き取れるようになるのか—そこから始める指導法もあるのではないのでしょうか。

- ▶ 「Examples → Drill → Dictation → Comprehension Exercise」という流れで、効率よくリスニングのコツを学ばせることができます。
- ▶ Comprehension Exercise のスクリプトは、個々のレッスンの音声ポイントを集中的に扱い、高校1年生程度の簡単な語い・表現で書かれています。
- ▶ いわゆる「英語音声学」で言われる「音の結合・省略」などを、初めて高校生向きに分かりやすく示したリスニング教材です。



## 目次

Lesson 1 [æ], [ʌ]	2	Lesson11 助動詞、前置詞、接続詞、関係詞、some	22
Lesson 2 [ɑ], [ɔ], [ɑɔ]	4	Lesson12 直前の語と母音とのつながり	24
Lesson 3 [i:]と[i], および[u:]と[u]	6	Lesson13 [t]と[d]の弾音化	26
Lesson 4 [ou], [ɔ:], [ɔə]	8	Lesson14 消える音(1)-破裂音のつらなり	28
Lesson 5 [ɪə]と[auə]などの二重・三重母音	10	Lesson15 消える音(2)-[nt]の[t]など	30
Lesson 6 [v], [f], [hw]	12	Lesson16 [s]+[j],[t]+[j]などのくすれ	32
Lesson 7 [s], [θ], [z], [ð], [ʒ]	14	Lesson17 注意すべき語句の聞こえ方	34
Lesson 8 [l], [r]	16	Lesson18 イギリス英語の発音	36
Lesson 9 [l], [r]を含む音のつらなり	18	Lesson19 総合問題	38
Lesson10 冠詞、代名詞、be動詞、存在のthere	20		